

フォニックスからシャドーイングまで 英語音読指導 ハンドブック

鈴木寿一・門田修平 編著

A5判・418頁
本体2900円＋税

吉田晴世



音読指導のすべてが 網羅された1冊！

ずっしりと重い。400ページを超える大部なハンドブックであること以上に、編者・著者のこれまでの研究が集大成された「思いの込め」重さなのである。

本書は、第Ⅰ部：導入編，第Ⅱ部：実践編，第Ⅲ部：理論編，そして，初心者への配慮として，「基礎知識」が設けられている。この部構成はユニークである。

第Ⅰ部の導入で読者を引きつけた後に，現場の者にとって喉から手が出る程欲しい「明日の授業で使える」指導法が第Ⅱ部で紹介される。そして，自身が行った授業体験を通して得られた成果を振りかえる時に，第Ⅲ部の理論編が大きな意味を持ち，「ああ，そういうことなのか」と納得できる。

導入編：第1章の「音読指導自己診断テスト」は，授業や自主学習を始める際に直面する課題であり，その部分を具体的にかつ教室現場で活用できる方法を示している。

第2章は，「音読指導Q&A」で，音読指導はなぜ必要か？に始まり，シャドーイングやパラレル・リーディングにはどんな効果があるか？音読は入試対策として効果があるか？フォニックスはな

ぜ必要か？いろいろな音読指導法をどのような順序で用いればよいのか？等の，現職教員がまさしく求めている疑問に答えてくれる。

実践編は，7章から成り立っているが，第3章の「3.6 変化をつけるための音読指導法」は，とても興味深い。ネイティブ・ピッチ音読／妨害読み／追っかけ読み／逆さま音読／つつこみ音読／リレー音読／役割別音読／スキミング音読／輪読など，「どのような指導法なのだろう」と，思わずページを開きたくなるキーワードが含まれている。

第5章「教科書を用いた音読・シャドーイング指導（中学校）」は，教室現場で特に役に立つ情報である。会話文，説明文，物語文のジャンルにより指導法が異なる。これは，ある意味指導上の盲点であり，音読・シャドーイングの広さと深さを教示してくれるものである。

さらに，第6章「教科書を用いた音読・シャドーイング指導（高校）」の中の「文法指導における音読指導」と「語彙指導における音読・シャドーイング指導」は，リーディング教材でなくとも音読指導は可能であることを示してくれる。

理論編は，いわずもがな，多くの学術的背景を，わかりやすい表現で解説している。音読実践を経験後に読む者にとっては，「なるほど」とおもわず膝を打つ解説となっている。何度も何度もページを手繰り，2倍の厚さに膨れ上がるほど読み込んでいきたい，教育的価値のある著書である。

(よしだ はるよ・

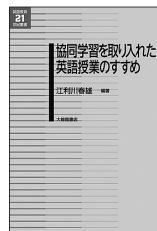
大阪教育大学教育学部教授)

協同学習を取り入れた 英語授業のすすめ

江利川春雄 編著

四六判・272頁
本体2000円＋税

伏野久美子



協同学習で

質の高い英語授業を实践

英語教育は「知識としての英語」から「使える英語」の教育へと変容してきている。本書は時代の要請に応えるべく，協同学習を使用して英語運用力を高める実践例を豊富に紹介している。まず協同学習の基本理念を押さえた上で，英語授業での協同学習の進め方の概略を解説し，次に，小学校から大学まで各レベルでの実践例を豊富に紹介している。その後，教室での協同学習から「学びの共同体」構築への道筋を示し，最後に教師が疑問に思うと予想される事柄についてのQ&Aも用意されている。

本書は「学びの共同体」と日本協同教育学会で定義する「協同学習」の両者の理念を融合しつつ，学校現場で教師が協同学習を実践していくための「教師目線」を貫いている。第1章では，実践の支えとなる11の理念を説明する：a)建設的な支え合い，b)グループ作りと座席の配置，c)小集団でコミュニケーション力養成，d)個人の責任の明確化，e)ハイレベルな教材やタスクの設定，f)グループによる振り返り，g)協同学習での評価法，h)学びを深める教師に，i)授業公開と教師の同僚

性の向上, j) 自分の授業改革から全校的な改革へ, k) 保護者・地域住民の参加。

第2章では、実際に英語の授業に協同学習を取り入れる場合の留意点を提案する。英語教育での協同学習の実践には、他教科とは異なる独特の難しさが伴う。それを踏まえた上で、一斉授業と協同学習の組み合わせ、日本語による話し合い、到達目標・課題・評価基準の明示、相談タイムの設定、質の高い教材とタスクの設定など、第二言語習得理論を鑑みても納得できる方略を提唱している。

第3章からは小学校から大学までの実践例を詳細に紹介する。どの例も魅力的でアイデアに溢れており、少しの工夫で校種の枠を超えて活用可能なものばかりである。例えば、小学校での「テーマ“Garbage”で学ぶ外国語活動」は英語使用率を増やせば、高校や大学での授業にも取り入れられる。

本書の最大の魅力は、進学校での実践も紹介されていることであろう。質の高い教材を協同学習で深く学ぶ実践例、ハンドアウトを活用し「文法・訳読教授法」でも大学受験にも配慮した協同学習が可能なことを示した例、プレゼンテーションやディスカッションなど課題の高度化により生徒の英語総合力の向上に成功した例、ICTを活用した例など、どの実践も、高レベルのタスクを課すことで、進学校でも協同学習を用いることができ、質の高い学びを創出することが可能であるということを示している。本書は幅広い読者に対応しているが、特に高校の先生に読んでいただきたい1冊である。

(ふしの くみこ・

立教大学ランゲージ・センター教育講師)

タスクを活用した英語授業のデザイン

松村昌紀 著

四六判・320頁
本体2400円＋税



戸出朋子

タスクの真髄に迫る

本書は、「タスクとはどのような活動を指すのか、日本の学校教育の条件下でどう活用すればいいのか」といった教師の疑問から出発し、それぞれに対して著者の答が展開されるという形をとる。タスク関連の書籍は多く出版されているが、タスクの定義、意義、日本の学校英語教育での実施可能性などについて疑義・誤解が尽きない。本書は国内外の文献の綿密な調査に基づき、疑問を解きほぐした上で、著者独自の「タスク媒介型の指導」を提案する。理論面が丁寧に掘り起こされ、タスクの正しい理解に導かれる。以下に、特に重要と思われる内容について要約を試みるので、読書の指針になればと思う。

1～3章を読み進める中で、タスクとは何かへの理解が深まる。まず「活動成果の重視」、「意味へのフォーカス」、「自然な認知プロセス」、「学習者の主体的関与」というタスクの4条件の説明とともに具体例が挙げられ、それがなぜタスクなのかタスクでないのかが解説される。タスクは言語使用の場面を生み出す「シーンセッター」にすぎず、指導法のパッケージではないと著者は強調する。タスクをどう活用して授業展開する

かは教師が決定すべきなのだ。次にタスクを活用した授業展開の一形態である「タスク中心の言語指導」について解説が続く。この指導では、従来のPPP(提示・練習・表出)型指導と違って、タスク活動が文法指導に先行する。PPP型指導は「学習項目を学習者の外部で決め、授業時間内にその完全習得を求める」のに対し、タスクを中心とした授業展開では、学習者は自分の「内側から生み出される意味」から出発し、四苦八苦する中で生まれた疑問に対して「その答を与えられる形で文法に出会う」と言う。

ここで「未習のこたえを使えるわけがない」、「日本の学校教育の諸条件下ではタスク中心の指導は無理」という反応があるであろう。

4章ではそれに対する答が「タスク媒介型の指導」の提案の中で示される。この指導では文法シラバスの教科書使用を前提としているが、タスクが目標文法事項の導入に先行する。もちろん学習者は教えられていない文法項目を使えるわけがない。彼らは自らの能力を駆使して自由に表出するのだ。ここでタスクは、既習事項を繰り返し使う機会を生み出し、同時に、後続する目標文法事項導入の際の意味の文脈となると言う。日本の他の学者たちが提案してきたPPPの枠組みでのタスク活用法とは決定的に異なることがわかる。

後の章ではマネジメントやテストを含む実践上の助言が続く。教師へのメッセージで締めくくられる。繰り返し語られる著者の言葉が、タスクの真髄の理解や固定観念からの解放へと我々を導いてくれる。

(とで とこ・広島修道大学人文学部教授)